



TITLE:

蒙古社会経済考(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

伊藤, 幸一

CITATION:

伊藤, 幸一. 蒙古社会経済考. 京都大学, 1967, 経済学博士

ISSUE DATE:

1967-05-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/212234>

RIGHT:

【 14 】

氏 名	伊 藤 幸 一 い と う こう いち
学 位 の 種 類	経 済 学 博 士
学 位 記 番 号	論 経 博 第 16 号
学位授与の日付	昭 和 42 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	蒙古社会経済考

論文調査委員 (主 査) 教 授 堀 江 保 蔵 教 授 堀 江 英 一 教 授 山 岡 亮 一

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、元朝成立期ごろの蒙古社会を、チンギス・ハーンを戴く蒙古民族がどのようにして世界制覇をなしとげたかを中心に、主として経済史的方法で研究したもので、プロローグ、第1編基礎編、第2編経済編、第3編社会編、エピローグから成る。

第1編では、まずモンゴル高原の自然が文化地理学的に概観せられ、とくにそのステップ地帯が、住民の遊牧専門化傾向に対して持った意味が明確に論ぜられており、ついで、チンギス・ハーンの外征を促したものであるとして、人口過剰説、好戦的性状説に対し、蒙古民族の生業や生活状態を考察する必要が力説されている。

それを受けて書かれた第2編は、生産と流通の2章に分述されている。第1章でとくに重要視すべきは、(1)牧畜の対象となった羊・馬・牛・山羊・駱駝などの家畜は、食料用・燃料用・加工材料用・交通用などそれぞれの用途に対して特色を持ち、しぜん自給自足に近い経済を可能ならしめ、もって蒙古民族のあいだに遊牧専門化を発達させたこと、(2)牧草地の占拠争いから、武力の大小その他を条件として、遊牧集団に大小強弱の差が生じ、同時に家畜を含めた全財産の私有制が成立し、かくてそこには、集団の頭首とその従属者の別、大集団と小集団との別が生じたことであって、著者はそこに至る過程を詳しく論じている。流通を論じた第2章では、交通機関としての家畜のことや駅遞制度のこと、さらに外部民族との通商関係や通貨のことが、やはりそれらを主として必要とした有勢者の状態に着目して述べられている。

第3編は社会構成と社会慣行の2章から成り、とくに重要なのは、蒙古民族のあいだに遊牧社会特有の封建制度が成立したことを論証している第1章である。すなわち、自然の状態や武力・支配力などによって遊牧の限界（縄張り）が生じ、多くの遊牧集団が形成せられ、その縄張りは固定化の傾向を持ち、それぞれ領主を戴く領地となり、やがてチンギス・ハーンを最高の権力者とするピラミッド形の社会構造が実現したと説く。これは生産や流通の発達に照応する発展であって、このような発展があつて初めて強大な元朝が成立することができたとしている。以上のような社会秩序を明確にしたものとして書かれているの

が第2章であって、そこでは、蒙古大法典、儀礼的慣行、社会理念が取上げられている。

本論文の結論をなすエピローグでは、蒙古民族の掠奪・外征が生産力を補足ないし発展させるためのものであったことと併せて、「遊牧社会に封建制度なし」とする一般的通説に対する否定的批判を繰返し、元朝成立期ごろの蒙古社会は封建社会への移行期であったことが力説せられている。

論文審査の結果の要旨

(1) 本論文は、時代を元朝成立期ごろに限るとはいえ、蒙古民族の経済・社会について総括的に書かれた、類例の極めて少ない論文である。すなわち、ウラジミルツォフ（ロシア人学者）、岩村忍、安部健夫ら諸氏の論考以外には、断片的な研究しか存しない蒙古民族の経済・社会について、その自然的環境、民族の性状などを背景に置きながら、これを封建社会への移行期として捉えた本論文は、それとして重要な存在価値を持っている。

(2) 本論文は、文献資料に忠実に依拠して書かれている。もともと固有の文字を持たなかったこの時代の蒙古民族の研究は、漢民族や西方の商人たちによって書かれた紀行類その他に拠るほかなく、これらの文献によって書かれた第2次資料は、日本人学者によるもの、西洋人学者によるもの共にすこぶる多いが、本論文の著者は、これらの文献を博搜し、批判的に利用している。また第1次資料ともいべき中国文献をかなり広汎に渉猟しており、その読解力においても間然するところがない。

(3) 研究方法は歴史的接近方法にきわめて忠実である。すなわち、特殊な自然的環境のもとにおける蒙古民族の生産と生活に絶えず着目しつつ、その経済の発展を社会組織の変化に関わらせ、もって、同民族が世界史的大帝国を築きえた基底を明らかにしている。とくに注目すべきは、原始的経済形態であると見られがちな遊牧経済を、経済発展の一段階として位置づけ、採取経済の牧畜専門化を全経済および社会の発展の基底に置き、そこに成立した社会組織を原始社会から封建社会への移行期として、発展の姿において捉えた点であろう。

(4) もっとも、本論文には論証必ずしも十分でない幾つかの点がある。第2編第2章の中の商業や金融に関する叙述がその例であるが、もっとも重要なのは封建社会に関するそれである。すなわち、封建的支配者に対する被支配者の身分関係・財産関係などが必ずしも明らかに示されていない。しかし、第1次文献に拠るべきものの存しない状態の下においては、これは、ある程度、止むをえないことであり、むしろ、封建的社会関係の紐帯となるものが、農耕民族の場合とちがって、家畜であり、その再生産をめぐって封建関係が結ばれて行ったとする点に、本論文の独創性を認めるべきであろう。

(5) 以上要するに、本論文は、上述のような、多少の不十分な点があるにもかかわらず、著者に経済学博士の学位を授与するに値するものと信じる。